

## 東京都市大学教授 新居 千秋氏



—現状の建築教育をどう分析・評価する。  
「建築家を育てていくという視点で見ると、日本の建築教育のレベルは、世界と比べて著しく低下している。ペンシルベニア大学で客員教授として講義をした経験から、そのことを実感している。原因は読書量の減少に伴って勉強量が減っているからだ。さらに日本では、アルゴリズムやパラメトリックデザインの研究、そのツールとしてパキニームフォーマーや3Dプリンターなどを使った授業など、最先端技術に触れる教育がほとんど行われていない。欧米では、今より未来に向けての教育

### サトウの④ プロフェッショナル 建築教育

や身体的な教育を同時に行っている。「教育レベルを抜本的に見直す必要がある。社会とのつながりが開かれている中で、芸術など異分野の先生の授業が単位ならず、1級建築士を取導するためのカリキュラムが単位という考え方が正しいのだろうか。日本の建築教育は世界から10年以上遅れている。世界は加速版を増して進んでおり、日本はその差を縮めることが困難な状況にある」

「1級建築士資格についてどうするかを考える時期に来ている。海外では、職能の地位を守るために民間団体がライセンスを与えている。日本が知的財産を重視するのならば、それについて教育がどうあるべきかを考えなくてはいいけない。ミス・ファン・デル・ローエやルイス・カーンの名作は50年代の作品だ。私自身もこれから建築家にならんとしている。学生にも自分をゆっくりと教育してほしい」

「建築には哲学が欠かせない。具体的に形にするのではなく、日本のあり方やこの国の姿について、考えることをさせないといけない。さらに文章力を養う教育も重要であり、図面や模型を使って筋道立てて説明する能力は、将来、必ず実務で役に立つ」

「大学院の計8年に縮めることは難しい」  
「実務者として建築教育に何を求める。」  
「建築には哲学が欠かせない。具体的に形にするのではなく、日本のあり方やこの国の姿について、考えることをさせないといけない。さらに文章力を養う教育も重要であり、図面や模型を使って筋道立てて説明する能力は、将来、必ず実務で役に立つ」

# ものを見る目、考える力を育てる

—建築士資格試験の要件変更によって建築教育システムが変わった。  
「あくまで私見だが、耐震偽装事件は技術の問題ではなく、哲学や倫理、設計料の問題だ。それが技術の問題に転化してしまった。大学では建築の哲学や職能の誇りを教えるのが基本だ。だが、現在は本を読まず勉強しない学生にカリキュラムを詰め込み、追い回している状況になっている」  
「国が付与する技術ライセンスであ

—実務教育(インターシッピング)制度をどう見る。  
「インターシッピングの受け入れ先のレベルで教育水準がバラバラになることを危惧している。東京都市大では実務認定1年の場合、学内インターシッピングによって教育水準を維持する方針だ。欧米のインターシッピングは、学生が自ら行きたい事務所を探し、卒業を完全にオフにして出向く。欧米で7年〜7年半で行う教育を、学部4年と大

「大学間の横のつながりが希薄になっているのも問題だ。教育レベルを上げるとともに、大学間が互いに学生を受け入れるような仕組みや体制の改良、教師の移動がもっと頻繁に行われる必要がある」  
—国際基準とは違う日本独自の建築教育を今後、どうしていくべきか。  
「アーキテクトとエンジニアの教育や教育年数などについて、ただ日本の教育システム、教育時間に合わせて

「50年、100年先に日本が世界の先端をいく国として生き抜いていくにはどういった視点で考えなくてはいいか。現在は教育が危機にひんしているだけでなく、建築に携わる若い人たちが普通に暮らしていることも難しい状況にある。非常に残念なことであり、何かしないといけない。不逞極の決意で方向転換するべきではないだろうか」。(隔週金曜日報載)